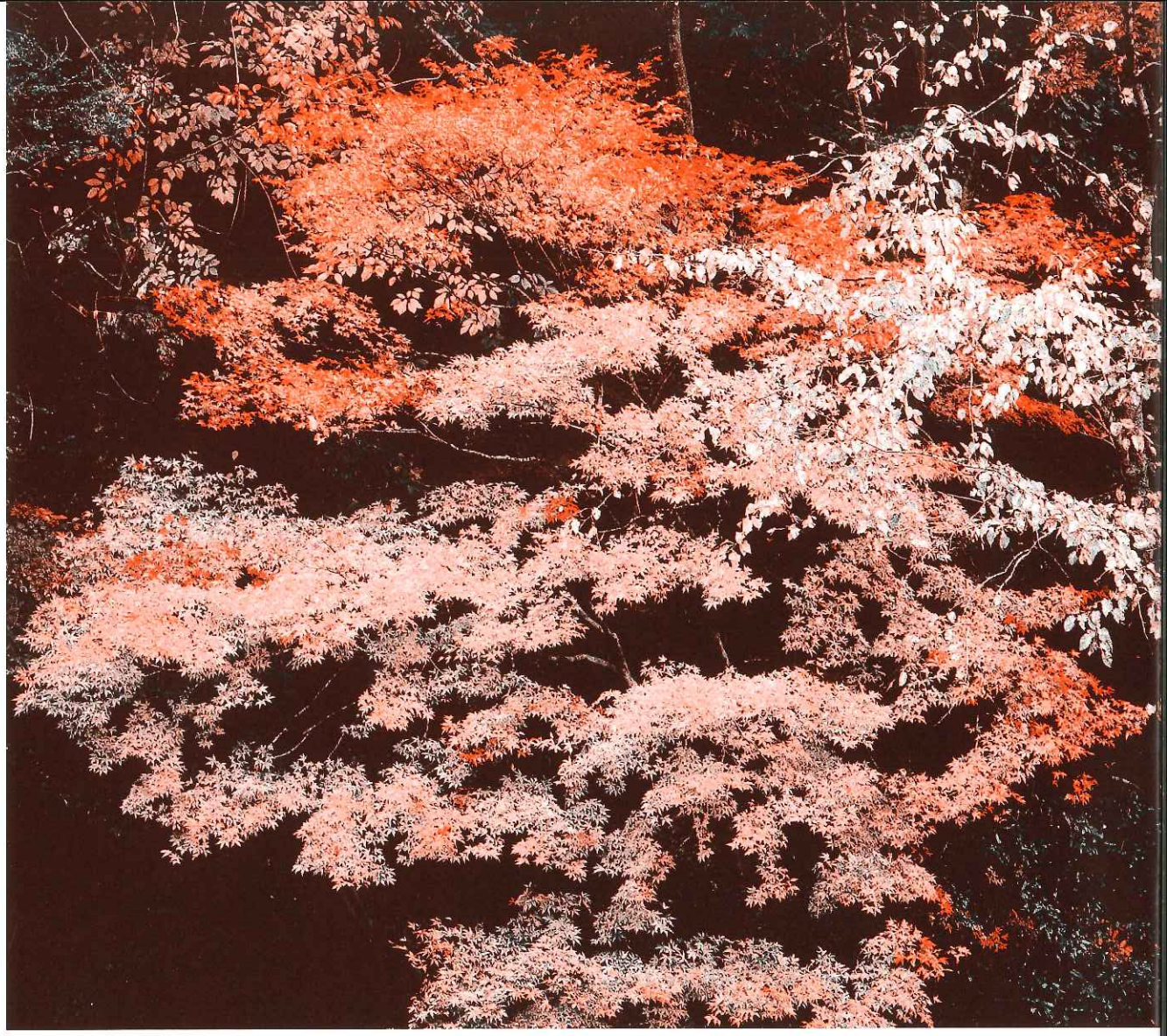
高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.26



●「薄紅葉（佐川町牧野公園）」（写真提供／山内敏男）

リレー随筆㉖　川端康成、美の山塊 ―― 水原　園博

「川端康成―文豪が愛した美の世界」展が高知で開催される。財団法人川端康成記念会理事長、川端香男里先生はじめ、監修の平山三男氏、そして企画者の私にとっても歓びは大きい。

川端先生は義父康成の死後、川端文学の継承と、美術品散逸防止のため財団法人設立に着手された。

当展の特徴を考えてみたい。まず作家が筆一本で購った百三十点の美術コレクションであること。実業家が金にものをいわせ収集したものではない。

東山魁夷氏の絵画十七点を始めとする、美術品の素晴らしさのみならず、美に触れた文章も見逃してはならない。例えば、『埴輪乙女頭部』について、川端は「ほのぼのとまどかに愛らしい…この埴輪の首を見てゐて、私は日本の女の魂を呼吸する。日本の女の根源、本来を感じる…」と記す。この文章私は何度読み返したことだろうか。あきないのである。

あまたの文学者のなかで、収集した美術品、即ち美と文学の融合展が開催されたのは、川端を嚆矢（こうし）とする。

川端はよく「邂逅（かいこう）」という言葉を揮毫した。美術品も巡り合いの賜物である。著名な骨董商が川端邸を訪れた。購入されなかった美術品も、しばし川端の手元にあれば、出自に箔がつき、更なる付加価値を得た。川端の審美眼がいかに信頼を得ていたか。まさに幸せな循環といえよう。

先日、鎌倉、長谷（はせ）にある川端邸を訪ねた。川端先生が喜色満面。見ると、床の間に、未知の絵がある。蔵から、前衛芸術の旗手、草間彌生氏の水彩画を発見したという。それも五十年前の草間氏が無名の頃のもの。題は『不知火』と『雄しべの愁い』、前者は実に幻想的な絵であった。

川端は新人を積極的に発掘、育成した。北条民雄や当地の作家、上林暁のみならず、東山魁夷、牧進などの画家にまで及ぶ。川端の確立した美の山塊の裾野は広く、限りなく深い。

当展が高知に来た経緯を説明したい。二年前の冬、底冷えのする京都、三条高倉の京都文化博物館。川端展最終日に、高知県立文学館長、橋田憲明氏が訪れられた。展示内容に感激された館長は、これを高知へと思い立ち、京都文化博物館を通じ、私に開催の打診をされたのである。

前途には難問が横たわっていた。それは美術品コレクションに国宝が三点含まれていたためである。国宝、重文の公開については、文化庁は厳しい規制を設けている。美術館、博物館など、展示実績のある場所でしか許可しない。しかしその問題も、副館長が上京し、担当官との交渉の末、なんとか解決策を見いだすことができた。文学館での展示はきわめて異例なのだ。こうして『凍雲篩雪図』、『十便図・十宜図』が公開の運びとなったのである。

（毎日放送　事業局
チーフプロデューサー）

高知県立
文学館

◆ミニ企画展紹介◆

2004年12月1日(水)～2005年1月30日(日)

すてきな絵本の世界展

～コールデコット賞受賞作品を中心に～

ランドルフ・コールデコット
(1846―1886)

コールデコット賞は、前年にアメリカで出版された絵本のうち、もっともすぐれた作品の画家に対して贈られる賞です。

この賞の名前は、イギリスで活躍した絵本作家・ランドルフ・コールデコット（1846―1886）にちなんでいます。ランドルフ・コールデコットは、近代絵本の父とも呼ばれ、絵本の歴史の上でもっとも重要な絵本画家のひとりです。

19世紀後半のイギリスでは、印刷技術の発達とともに、美しい色彩とデザインを持つ、子どものための絵本が誕生しました。その代表的な画家の一人が、コールデコットでした。

コールデコットは、彼より少し先に活躍しはじめたウォルター・クレイン（1845―1915）の後継者として、当時著名な彫刻師であったエドモンド・エヴァンスに見込まれ、「トイ・ブック」と呼ばれる多色木版刷りの絵本を描くようになります。トイ・ブックは、現在の絵本の原型で、当時急速に発達した鉄道の駅々で売られていました。値段は6ペンス（現在の約300円相当）、もしくは1シリング（現在の約600円相当）。1タイトルにつき7万部以上出ていた本もあり、また出版社によっては100タイトルを超えるシリーズを抱えていたといいます。「トイ・ブック」が当時の子どもたちの間でいかに多く読まれていたかがわかります。

コールデコットは、1878年のクリスマス直前、ジョージ・ラウトリッジ・サン社から、処女作である『ジャックがたてた家』と『ジョン・ギルピンのこっけいな出来事』の2冊の本を出版し、この2冊が評判になり、以降、1886年に39歳の若さで亡くなるまで、シリーズとして16冊が出版されました。

コールデコットの絵本には、イギリスのどこにでもある風景や、動物や、人々がいきいきとした躍動感をもって描かれています。

コールデコットがマザーグースを素材にして描いた絵本『ベイビー・バンティング』(1882年)は、赤ちゃんのおくるみにウサギの毛皮を手に入れようと、お父さんが狩りに行く話です。狩りは失敗しますが、お父さんは毛皮を町で買って帰り、家族は喜んで赤ちゃんに毛皮を着せます。一番最後のページには、ウサギの毛皮にくるまった赤ちゃんの家族と、ウサギたちの集団がばったり会っている場面の絵があります。

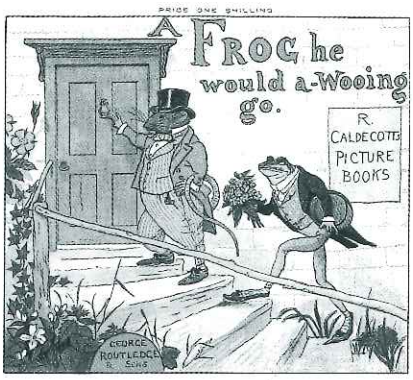
『ヘイ・ディドル・ディドル・アンド・ベイビー・バンティング』(合本、1882年)

この絵本のテキストには、「赤ちゃんに着せるウサギの毛皮を手に入れようと、お父さんが狩りに行く」という言葉しかありません。お父さんが狩りに失敗してお店で買う、という言葉もありませんし、赤ちゃんの家族とウサギたちが出会うという描写もありません。しかし、コールデコットは、独自の解釈で短い文章をふくらませ、奥行きのある絵本の世界を作り上げたのです。

現代のアメリカを代表する絵本作家モーリス・センダックは、この最後の絵の子どもの表情に特に強い関心を示しています。「赤ちゃんは、自分をくるんでいる暖かい素敵な衣装がこの生きものたちから来たのだということを、おぼろげに悟ったかのように、当惑しきった表情で兎たちを見つめています。すべては赤ちゃんの目に――たった二本の線にこめられています。ペンでちょんちょんとやっただけなのに、それがあんまり鮮やかなので、そこには……そう、読み取りたいものがひとつ残らず表現されています。私が読み取るのは、驚きであり、人生に対する当惑です。兎の皮はここから来るんだろうか？自分が服を着るために、何かが死ななくてはならないのだろうか？」(『センダックの絵本論』1990年、岩波書店)

別の絵本『かえるくん　恋をさがしに』(1883年)は、かえるがねずみと連れだってお嫁さんをさがしに行く話です。はつかねずみのお嬢さんと出会って

『ベイビー・バンティング』より（1882年）



『かえるくん　恋をさがしに』（1883年）

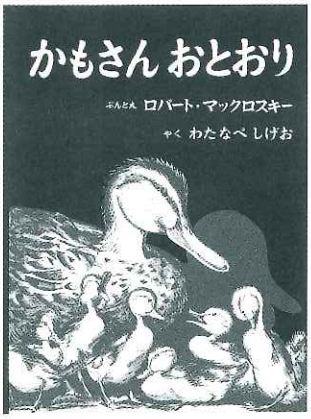
楽しく遊んでいるところへ、突然ネコが飛び込んで来てはつかねずみに襲いかかります。かえるは驚いて逃げ出しますが、その途中、小川でアヒルに一飲みにされてしまいました。この結末のあとに、最後の一枚の絵があります。かえるがアヒルに飲まれる前に落としたオペラハットを指して、人間の家族が何か話している絵です。この絵があることにより、悲劇的な結末に余韻がうまれます。センダックはこの絵を、両親が子どもに次のようなことを語っている場面と解釈しています。『そうだね、不幸な出来事だったね。しかし、こういうこともあるんだよ。この物語の結末はこうで、それはもうどうしようもないんだ。だけど、おまえたちにはお父さんとお母さんがいる。しっかりつかまっておいで、大丈夫だからね』と。

センダックは、自分自身がコールデコット賞を受賞したときの講演でこういっています。「私にとっては、コールデコットの偉大さは、嘘もごまかしもない目で人生を洞察しているところにあります。彼の世界では真実が骨抜きにされることは決してないのです」。

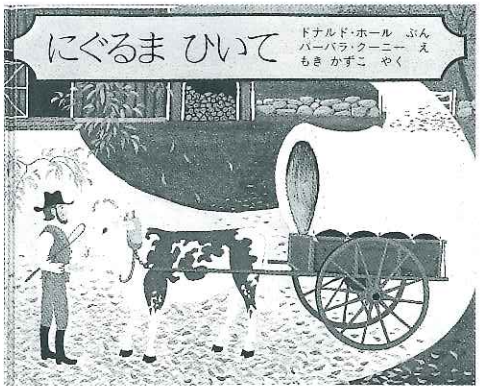
◇

コールデコット賞は、児童文学賞の「ニューベリー賞」に準じて設けられた賞です。ニューベリー賞は、コールデコット賞より17年早くはじまりましたが、その対象は、子どものためのフィクション、ノンフィクション、ドラマ、詩歌で、そこに絵本はふくまれていませんでした。そこで、絵本を対象としたこのコールデコット賞が、1937年にアメリカ図書館協会によって創設され、翌年から授賞が行われるようになりました。

絵本の歴史を築いたコールデコットの名にふさわしく、この賞には数々の名作絵本が輝いています。ロバート・マックロスキー『かもさんおとおり』（1942）『すばらしいとき』（1958）、バージニア・リー・バートン『ちいさいおうち』（1943）、ロジャー・デュボアザン『しろいゆき　あかるいゆき』（1948）、ルドヴィッヒ・ベーメルマンス『マドレーヌといぬ』（1954）、マリー・ホール・エッツ『クリスマスまであと九日　～セシのポサダの日』（1960）、マーシャ・ブラウン『むかしねずみが…』（1962）、モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』（1964）、バーバラ・クーニー『にぐるまひいて』（1980）、クリス・ヴァン・オールスバーグ『ジュマンジ』（1982）『急行「北極号」』（1986）など、受賞絵本のほとんどが日本語に訳されて多くの子どもたちに読まれています。また、コールデコット賞の副賞であるオナー・ブックにも、マリー・ホール・エッツ『もりのなか』（1945）、八島太郎『からすたろう』（1956）、レオ・レオーニ『スイミー』（1964）、アーノルド・ローベル『ふたりはともだち』（1971）、デビッド・マコーレイ『カテドラル』（1974）、トミー・デ・パオラ『まほうつかいのノナばあさん』（1976）ほか、時代を超えて愛されている絵本が多くあります。



『かもさんおとおり』（1965年、福音館書店）



『にぐるまひいて』（1980年、ほるぷ出版）

『ちいさいおうち』（1965年、岩波書店）

本展では、これらのコールデコット賞受賞絵本を展示紹介します。絵本はすべて神戸市在住の青山章子さんの提供によるものです。1938年以来、長い歴史を持つコールデコット賞の絵本を実際に手にとってご覧いただけます。

子どもの頃に出会った絵本は、大人になってからも1ページ1ページが鮮明に記憶に残っています。絵本の世界に想像力を羽ばたかせることができるのは、子ども時代のすばらしい特権です。大人の方も、子どもだった頃の絵本と再会すれば、懐かしさだけでなく、きっと新たな発見があるでしょう。本展が、ゆっくり絵本のページをめくるきっかけになれば幸いです。

記念講演会

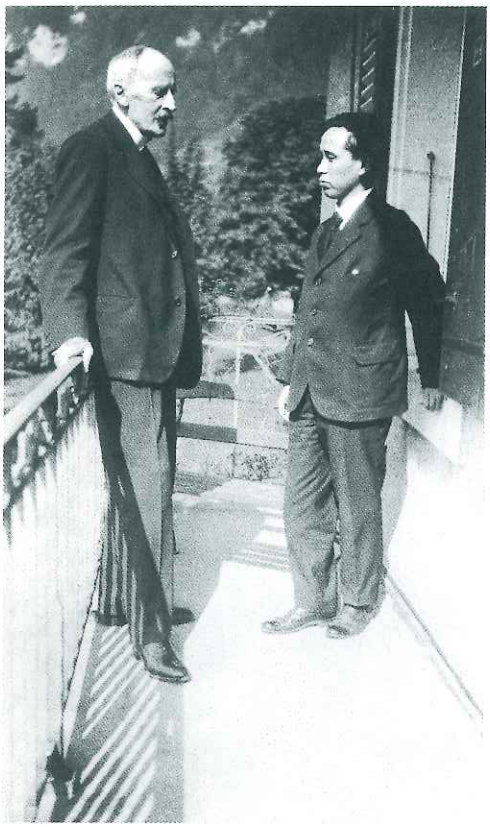
「ランドルフ・コールデコットの絵本、その伝統と発展」

吉田新一氏（児童文学者）

2004年12月12日(日)　13時30分～15時
文学館1階ホール
定員：100名(当日先着)
※入場無料

学芸員メモ

資料紹介（ロマン・ロランの手紙から）



ロマン・ロランから送られてきた、ロラン（左）、上田秋夫（右）の写真。

上田秋夫宛　ヴィルヌーヴ

一九二八年十一月十五日

自分が「春」であることを知らない、親しい「愛すべき秋」（上田秋夫）よ。私は数週間前に妹のマドレーヌから、あなたにこの二枚の写真をお送りするように、と言われていたのを忘れていました。この写真をご覧になれば、あなたがここへおいでになった時のことを思い出されるでしょう。一枚のほうでは私がまるで巨人のようで、写真のなかにおさまりきれずに天までとどいています。これにはあなたもお笑いになるでしょう。

あなたを愛する友の

ロマン・ロラン

ロランの令妹、マドレーヌ・ロランが撮ったのだろうか。この文面とともに二枚の写真が添えられていた。一枚の写真には、偉大なロランを前にして、視線を合わせられない、緊張のおももちの上田の姿が写し出されていた。七十年の時を超えて伝わってくるなんとも微笑ましい光景である。

一九二八年九月上田秋夫は、スイス・レマン湖畔のヴィラ・オルガにロマン・ロランを訪ねた。上田二十九歳、ロランに惹かれての単身渡欧だった。ヨーロッパ滞在はわずか一年三カ月であり、フランス語は決して堪能とは言えない上田だったが、世界平和に対するゆるぎない信念、芸術家として、人道主義者としての思想やその高潔な生き方など、ロランからの影響は大きい。そのほかにも、片山敏彦、尾崎喜八、倉田百三、高田博厚、宮本正清といった多くの日本の若人たちが、ロランから影響を受けている。

上田秋夫。ロランに「自分が春であることを知らない、親しい愛すべき秋」と言わしめた、やさしい眼差しのこの人物のプロフィールをここで振り返ってみよう。

一八九九年、高知生まれ。東京上野の美術学校（現在の東京芸大）木彫部卒業。高村光太郎、高田博厚、片山敏彦らと同人詩「大街道」「東方」に参加。雑誌「生活者」「新しき村」などに寄稿。一九二七年東京で第一詩集『自存』刊行。一九二八年、フランスに渡り一年三カ月滞欧。ロマン・ロラン、マルセル・マルチネらと親交を結ぶ。帰国後『マルチネ詩選』翻訳刊行。翌年『続マルチネ詩選』、詩集『五月柱』など刊行。一九三二年帰高。出版社「新生社」設立。「映画高知」「鉱脈」を出版。一九三六年、感想集『氷花集』刊行。一九五六年ロマン・ロラン著『ミケランジェロ』翻訳刊行。戦後、詩集『上田秋夫詩集』『上田秋夫詩集年輪』『詩文集参道』などを出版。一九五九年、詩壇やこども高新の選者として活躍した、二十二年勤務の高知新聞社を退職。その後、土電会館に十四年間勤務。一九六五年、第一回詩画個展開催（その後も二回開催）。日本的な清楚さと西欧の深さに惹かれて、詩作とクレパス・パステル画にうちこんだ清雅な晩年をおくる。一九九五年三月二十二日、土佐市蓮池で九十六歳で死去。高知市筆山墓地に埋葬されている。

当館では、永田和子氏のお世話で、ご遺族から、十四通に及ぶロマン・ロランからの書簡や絵葉書、ロランの令妹マドレーヌやマルチネからの書簡、ロランの献辞とサインの入った初版本、秋夫の直筆原稿などを寄贈いただいており、今回ご紹介しているのは、ロランの書簡の一部である。

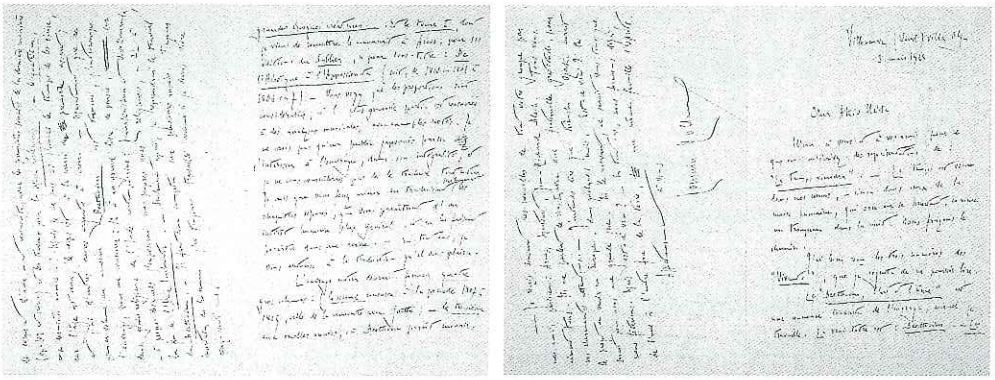
ここに一九二八年三月三日付けの手紙がある。少し長いがご紹介しよう。

親愛な上田秋夫

私の『時は来たらん』の上演についてお知らせくださって、あなたとお友達とにお礼を申します。―暗がりの中の家畜の群れのように、ぶつかり合いながらさまよっている群集の心にはいざ知らず、私たちの心には時が来ています。私たちは道を切り開いています。

雑誌「生活者」三冊をたしかにいただきましたが、残念なことに私には読めません。

「ベートーヴェン芸術と魂」は、いま私が書いている著作のいわば予告編です。



上田秋夫宛、ロマン・ロラン書簡（1928年3月3日）

ほんとうの題名は『ベートーヴェン　さかんな創造の時期』です。第一巻の原稿をアルコスのサブリエ書店に渡しましたが、その副題は「エロイカからアパッショナタまで」（一八〇〇年ないし一八〇一年から一八〇六年ないし一八〇七年まで）です。―その量はそうとうにぼう大です。そしてその大部分は楽譜の実例をあげた音楽的分析です。日本の読者がその著作の全体に興味をもつとは思われません。ですからあなたがその全部を翻訳することはお勧めしません。むしろあなたにとって人間的に興味が覚えられ、一般的であると思われる各章だけを翻訳して、それを雑誌に発表なさるほうがいいと思います。―いずれにしてもお望みならば翻訳なさることをあなたにお許しします。

著作の全体は厚い四冊になるでしょう。（第二巻は一八〇七年から一八一九年までの時期に当てられます。つまり、ゲーテとの会見の時期です。第三巻は苦しい悩みの時期、―ベートーヴェンが身も心も死ぬかと思われた時期と、それから復活して、後期のピアノ・ソナタの初めのもの（作品一〇一とそれにつづくもの）や『ミサ・ソレムニス』のための仕事の時期とに当てられます。第四巻は晩年の時期に当てられます。）けれどもはたしてその全部を書くだけの時間があるかどうか疑問です。なぜならもう老齢に達していて、病気に襲われれば身体がそれに抵抗できないからです。

なお、他にも急いで書かなければならない仕事もあります。

（中略）

私はまるで五百歳まで生きるつもりでいるような仕事ぶりをしています。

私はパリの友たちから、私たちのグループの消息をたびたび受け取ります。アルコスとか、マルチネとか、ジャン＝リシャール・ブロックとかですが、みんなあなたを愛しています。みんな父親のような感情をこめて、あなたの愛すべき心づくしに感謝しています。―尾崎喜八が数カ月後にヨーロッパへ来る計画を立てるとか聞きましたが、ほんとうでしょうかもしそうだとしたら私たちには大変うれしいことです。彼を迎えることは私たちにとってあなた方全部を迎えることになります。けれどもそれはほんとうでしょうか。―いずれにしてもわれわれはすでにもう、地球の一つの面から他の面へわたって、精神の一家族をつくりだしているのです。

あなたの愛情ふかい友の

ロマン・ロラン

ロランがいかに日本民族の本質を理解し、日本人の長所をふかく愛していたか。この文面からも窺えるだろう。そこには異国趣味的な好奇心や審美感覚などは少しも見られない。ロランにとっての日本とは、人類の住む一地域であり、日本人は、ヨーロッパ人と同じ人間なのである。当時の日本の若人たちの心をひきつけたロランの一番の魅力は、ここにあるのだろう。

（学芸課　津田加須子）

閲覧室から

評伝『片山徳治』

永田　和子　著

ロマン・ロランの日記に「彼には非常に好感がもてる。こころよく、賢い顔。ヨーロッパ芸術のあらゆる領域にわたって非常に教養があり、西欧の優れた知識人たちについて、ほとんど我々と同じくらいなんでもよく知っていた」と書き記させた、詩人片山敏彦。その敏彦の父であり、若手自由民権医師として植木枝盛らと親交。寺田寅彦の主治医でもあった、土佐の知識人片山徳治の生涯に迫る。

本篇は、四部で構成されている。

一、奈半利幻想　片山徳治の故郷

二、片山徳治の生涯

三、片山徳治の家族たち

四、「あれが寺田の寅彦さん」

寺田寅彦と片山徳治・敏彦親子

発売元・高知新聞企業（株）

1800円

2004年4月発行

県内同人誌紹介

『雲母（KIRARA）』

「今を生きる高知の女性誌を創ろう。表現は巧みでなくともいい―」こんな呼びかけに呼応して集まった女性たちの雑誌。創刊は一九八九年五月で、年二回春秋の刊行をつづけて十六年になる。同人の大半は平和運動、母親運動などに携わった人たちで〝恒久平和への願いを実らせるために力を合わせていくこと〟を雑誌のキーワードにしている。

誌名の命名者は土田嘉平さん。のどかな「雲母」の語感に「KIRARA」とローマ字のサブタイトルをつけて、きらめく女性をイメージしたという。運動誌のリアル性に文芸、文学のイデアを加味させながら、現代を生きる雑誌でありつづけたい。毎号の〝招待席らん〟には男性にも執筆をねがってきている。

雲母の会代表　土田　京子

高知市万々一八〇

事務連絡　猪野幾久子

土佐山田町百石町一―一五

土佐文学さんぽ 24

江ノ口川沿いの文学

寺田 寅彦
猪野 睦

寺田寅彦文学碑

ひと昔前といっても、半世紀ばかり前になるが、寺田寅彦を伝える名物教師、地元学者たちがいた。授業で作品を教材にする教師もいた。寺田寅彦のえらさを語り、その生いたちの現場や、郷土にふれた作品を通じて生徒たちの眼を光らせた。江ノ口川沿いの旧邸、いまの寺田寅彦記念館に足を運び、熱をこめる人たちがいた。

のちに地球物理学者となってからも、菓子折箱に土を入れ、それを傾けながら土砂の地滑り、崩壊の具合を調べた。そういうちょっとした簡素実験のヒントなども、育った江ノ口川沿いの遊びのなかで身につけてきたものではなかったか。

寺田寅彦は西南戦争が終わった翌年、大久保利通が刺された年に東京で生まれた。父は陸軍関係にいた。六歳の年、転任する父と別れて祖母、母、姉と大川筋に買った家へ帰ってきた。江ノ口小学校へ入るが、当時の家の北側は、北山の裾まで田んぼが拡がっていた。家の前の江ノ口川の南へ高坂橋を渡ると、高知城がめぐっており、そこがのちの「花物語」にでてくる遊び場だった。

コウモリが飛び交う薄暗い城の石垣で、木の実を拾い虫とりに熱中した。やがて県立尋常中学をでて熊本五高へゆき、あと東京大学を経て物理学者になっていくが、この江ノ口川界隈は寺田寅彦を育んだ原点といってよかろう。

五高のとき夏目漱石を知り、のちに正岡子規の「ホトトギス」へ、少年時代の、もう幻想に近い高知城周辺、江ノ口川沿いの暮らしなどを「花物語」のなかへ書いた。多くの随筆を書き、これらが『冬彦集』『藪柑子集』としてで、物理学者とともに文学者吉村冬彦として知られていった。

「花物語」は九篇からなっており「畫顔」「凌霄花」「常山の花」「楝の花」などがあり、このひるがお、のうぜんかずら、くさぎ、おうちは、いずれも江ノ口川沿い、朝倉の少年時代の幻想と現実の交じる作品である。

家から川を南へ渡ると城山があり、木が茂り木の実があり、小学校の初年に算術を習いにゆく先生の家の松の木には、のうぜんかずらがからまっている。くさぎの木の下に甲虫を見つけ、夏のせんだんの木陰にはタガをはめる桶屋やキセル直しの羅宇屋がいて、世間話をしている明治十年代の風景がでてくる。読者をひきこむ筆致だった。

一九三五年、五十九歳で病死した。戦争末期の空襲で焼けたワラぶき旧邸には、戦後寺田記念館ができ、その後七七年に復元された。生誕百年を記念し、正面には「寺田寅彦先生邸跡」の碑と、その下に「天災は忘れられたる頃来る」の銘板が牧野富太郎の書で入った。

墓は東久万王子平にあり墓誌は小宮豊隆による撰書であり「専門ノ論文」で「世界ノ学界ヲ刺激スルコト尠カラズト稱セラル君マタ文章ヲ以テ名アリ」とたたえられた。

碑といえば江ノ口小学校に創立百周年記念のレリーフ入りの「寺田寅彦顕彰碑」があり「卒業生の偉材」「後輩立志の灯とする」が刻まれている。それにもうひとつ江ノ口川沿い城西公園桜馬場通り北詰めに寺田寅彦文学碑が高知ペンクラブによって建てられた。「花物語」の「畫顔」の冒頭が刻みこまれた。

このなかの「堀川に沿うて半町位上ると川は左に折れ舊城の裾の茂みに分け入る」とある、その「左に折れ」た場所である。この通りは槇村浩詩碑、馬場孤蝶句碑、竹本源治詩碑などあり、高知の文学碑通りである。

文学館の寺田寅彦特別展示室、旧邸復元の記念館、「畫顔」を刻んだ文学碑と高知城をめぐると、まとまりのいい寺田寅彦文学散歩コースになる。むろん一世紀をこえて周辺もかわった。だが家、川、高知城は原型であり寺田寅彦をしのばせるものがある。

資料受贈報告

（平成十六年六月～平成十六年八月）

敬称略

▼**岩村牙童**・「岩村牙童俳句集成　岩村牙童　夏爐発行所」▼**土佐電氣鐵道**・「土佐電鉄の100年　高知新聞企業　土佐電氣鐵道」▼**公文徹**・「豊凶の海　公文徹著刊」▼**瀬戸徑子**・「念ずれば花ひらく―瀬戸正美遺稿集―　瀬戸徑子編刊」▼**坂本安富**・「幕末洋学教育史研究―土佐藩「徳弘家資料」による実態分析　坂本安富　高知市民図書館」▼**永田和子**・「評伝　片山徳治　永田和子　高知新聞企業」▼**岡田憲佳**・「雪舟さんが歩いた道　岡田憲佳写真・矢富厳夫文　益田市観光協会」▼**谷俊宏**・「セルボーンの博物誌　西谷退蔵訳　博友社」他▼**横田晴光**・「坂本昭集　坂本昭　坂本昭集刊行会」他▼**上杉利則**・「七つボタン　上杉利則　南の風社」▼**山中覚**・「（句集）天の川　山中覚著刊」▼**稲垣詠子**・「夏美句集　吉本荻波編　吉本徳道」他▼**田村一翠**・「（句集）峠神　田村一翠著刊」▼**松岡登**・「津田左右吉全集　二十八巻・別巻五巻　津田左右吉　岩波書店」他…**津田左右吉**（一八七三～一九六一）は大正・昭和期に日本及び中国の思想史を主として研究した歴史学者。明治六（一八七三）年十月岐阜県加茂郡栃井村（美濃加茂市）に生まれました。本名親文。左右吉は通称。東京専門学校政治科（早稲田大学）を卒業後公立中学校の教員を経て満鉄東京支社に入社、満鮮地理歴史調査室員となり研究生活に入りました。そして、大正七（一九一八）年から早稲田大学教授となって

◆◆◆ 文学館日誌 2004年6月～2004年8月 ◆◆◆

6月

◆1日 俳人協会徳島県支部23名様観覧。◆8日 愛媛県土居文化協会（愛媛）43名様観覧。◆12日 語りと紙芝居の会参加者6名。◆19日 第51回朗読の会。午後2時～午後4時。文学館1階ホール。参加者25名。◆20日 日本文学原作の映画上映会「美しさと哀しみと」（1965年）松竹。107分。上映 午前10時15分～と午後1時～。解説12時10分～山川禎彦氏。参加者午前30名、午後32名。◆24日 第六小学校3年生25名。引率者2名観覧。／追手前小学校生徒5名。引率者3名。◆26日 第7回文学カレッジ（3回目）「瀾水と波静～子規のもとに出入りした土佐の俳人」講師：橋田憲明（当文学館長）。52名。◆27日 龍馬学園生徒45名。引率者1名観覧。

7月

◆3日 マザー・グース展開幕。／語りと紙芝居の会参加者10名。◆4日 ギャラリートーク「挿し絵でみるマザーグースの世界」解説：安田幸子氏。午後2時～3時。文学館2階企画展示室。30名。／西村淳氏（小山いと子令孫）ご来館。◆6日 高知市立城東中学校生徒5名。引率者1名観覧。◆10日 徳島ペンクラブ39名様観覧。◆14日 瀬戸内文学館協議会総務部会。◆17日 第52回朗読の会『マザー・グースを楽しむ』参加者35名。◆18日 ギャラリートーク「挿し絵でみるマザーグースの世界」解説：安田幸子氏。午後2時～3時。参加者30名。◆21日 夏休み社会体験学習（7／21～7／25）東高校1年生 立石 匠君、種田雅弥君。◆22日 槙村浩の取材5名（韓国）。／坂倉瑠香様（岡本弥太の長女）ご来館。◆24日 記念講演会「センス・オブ・ナンセンス」講師：島 多代氏。午後2時～午後4時。文学館1階ホール。50名。参加費1000円（高知こどもの図書館会員800円）◆25日 マザーグースであそぼう！講師：市川みどり氏。午後2時～2時30分。文学館2階ロビー。参加者28名。◆31日 第7回文学カレッジ（4回目）「上林暁～川端康成との縁」講師：松本秀正氏。15名。／第7回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査（県内3会場）参加募集〆切

8月

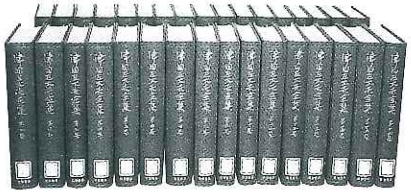
◆1日 コンサート「マザーグースを歌おう！」演奏：グループFAM。午後2時～午後3時。文学館1階ホール。参加者40名。入場料500円。◆3日 博物館実習16名（8／3～8／8）◆8日 マザーグースを描こう！ 講師：織田信生氏。午後1時～午後4時。文学館1階ホール。参加者31名。小学生対象。材料費500円。／開館時間延長（8／8～8／15）午前8時30分～午後6時。◆14日 語りと紙芝居の会6名。◆17日 土佐町社会福祉協議会小学生15名。引率者4名観覧。◆20日 第7回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査（大方会場）参加者33名。観覧者90名。◆21日 第53回朗読の会―音訳の世界― 第1部、第2部。午後2時～午後4時。文学館1階ホール。参加者34名。／学校法人日米学院18名観覧。◆22日 マザーグースであそぼう！ 講師：市川みどり氏。午後2時～午後2時30分。文学館2階ロビー。参加者22名。◆24日 第7回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査（安芸会場）参加者19名。観覧者41名。◆26日 第7回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査（高知会場）参加者58名。観覧者120名。／高知大附属養護学校生徒12名。引率者13名観覧。◆27日 高知北高等学校生徒12名。引率者2名観覧。◆28日 第7回文学カレッジ（5回目）「宮崎夢柳～埋もれた弁士文学者」講師：猪野 睦氏。文学館1階ホール。受講者31名。◆29日 日本文学原作の映画上映会『箱根風雲録』（1952年・新星映画社・前進座・136分）上映 午前10時～と午後1時20分～。解説午後12時30分～高橋 正氏。参加者29名。／わらべうたであそぼう 講師：岡本悦子氏。午後2時～午後2時30分。文学館2階ロビー。参加者19名。

地区審査（高知会場） 中学生の部

第7回文学カレッジ
「宮崎夢柳～埋もれた弁士文学者」

東洋哲学の講義を行いました。津田の学問は学界・一般社会の常識的通念と正面から対立する極めて、独創的な見解に溢れているものでした。大正から昭和初期にかけて刊行された著作は、「古事記」「日本書紀」などの日本の古典や中国古代思想史の著作に対する鋭い文献的批判に立脚したもので、当時の既成学統の権威を全て無視するかたわらで従来見過ごされてきた文芸作品の中から日本人独自の生活意識を見出してゆくものでした。このアカデミックな研究手法は彼が師事した白鳥庫吉の影響や在職した満鉄調査部の同僚との交友などを通じ独力で身につけたものでした。昭和十五年にはこの研究成果の一部が不敬罪に当たるとして告訴され有罪の判決を受け早稲田大学を退職することになりましたが、戦後これらの学問的業績が評価され、日本学士院会員となり文化勲章を授与されました。昭和三十六年十二月死去。八十八歳。

このほか、全国の個人、関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました厚くお礼申し上げます。


『津田左右吉全集』

高知県立文学館ニュース 第二十六号 平成十六年十月一日発行 〒七八〇―〇八五〇 高知市丸ノ内一丁目一番二〇号 電話〇八八―八二二―〇三二一 FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2004年
10～12月

10月――October	11月――November	12月――December

催しもの

第７回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◆県審査（公開）・記念講演会
（入場無料　当日会場へおいで下さい）
＜日時＞11月28日（日）　13時～16時
＜場所＞文学館１階ホール
・記念講演会／「ファンタジーの発想と展開」
講師：岡野薫子氏（童話作家）

＜森下雨村の本を読む（読書会）のご案内＞

『猿猴（えんこう）　川に死す』（昭和44年刊）
2005年春、没後40年展を予定している森下雨村の名随筆をご一緒に読みませんか。
12／５　12／19　１／９　１／16　２／６　２／27
の各日曜日の13：30～15：00、文学館ホールで開催。
参加ご希望の方は**11月14日までに**文学館受付に、またはハガキに、郵便番号、住所、氏名、ＴＥＬご記入の上お申し込みを。実費（本代1,529円）は12／５に集めます。

企画展示室

企画展　高知新聞創刊100周年・高知県立文学館開館７周年

「川端康成　文豪が愛した美の世界展」

11月21日（日）まで　＜料金＞一般1,000円、高校生以下無料

日本人初のノーベル文学賞を受賞した川端康成は、美術にも深い造詣を持ち、多数の美術品を収集しました。本展は「美術コレクター」としての川端に光を当てる初の展覧会です。親しかった画家たちの作品や、今回初公開となる川端が撮影した写真を展示し、文豪・川端康成が目指した美と文学の融合の世界をご覧いただきます。

※会期後（11月22～27日）は、展示物入替のため臨時休館となります。

＜出品作品＞（作品保護のため会期中展示替を行います）
・**国宝「十便十宜図」**池大雅・与謝蕪村＜1771年＞
※展示期間／９月28日（火）～10月27日（水）
・**国宝「凍雲篩雪図」**浦上玉堂＜江戸時代／19世紀初＞
※展示期間／10月23日（土）～11月21日（日）
・「芳野山図」池大雅＜江戸時代／18世紀＞
※展示期間／９月28日（火）～10月27日（水）
・ノーベル文学賞メダル・「縄文土偶女子頭部胸部」
・「女の手」（オーギュスト・ロダン）
・「美の存在と発見・続」（原稿／川端康成）・川端康成宛　上林暁書簡ほか

■関連行事

◇**記念講演会**（先着100名）
※要申し込み（参加無料）
10月23日（土）　14時半～
＜場所＞高知城ホール
「川端康成　美との邂逅」
講師：平山三男氏
（財団法人川端康成記念会評議員）
★**講演会申し込み**：ハガキまたはＦＡＸに、郵便番号、住所、氏名を明記の上、文学館まで。また館受付でも直接お申し込みできます。

◇**ギャラリートーク**
※要観覧券
10月３日（日）、10日（日）、30日（土）
11月７日（日）、14日（日）、20日（土）
各日14時～
＜場所＞文学館２階企画展示室

●平成16年度　専門講座●「宮尾登美子の世界に迫る（仮）」

◆**第１回**…12月11日（土）　◆**第２回**…１月22日（土）
・講師：渡辺　進氏（元高知市民図書館館長）
◆**第３回**…２月５日（土）　◆**第４回**…３月５日（土）
・講師：山川禎彦氏（作家）

※各回13時30分～15時
＜場所＞文学館１階ホール　　＜定員＞60名（先着順）
【お申し込み】ハガキまたはＦＡＸに、郵便番号、住所、氏名を明記の上、文学館まで。また館受付でも直接お申し込みできます。

【休館日】10月――４，12，18，25日　　11月――１，８，15，22～27，29日　　12月――６，13，20，26～31日

次回ミニ企画展紹介

「すてきな絵本の世界展」～コールデコット賞受賞作品を中心に～

2004年12月１日（水）～2005年１月30日（日）　＜料金＞一般350円（常設展含む）、高校生以下無料

◆**記念講演会**
（定員／当日先着100名）
＜日時＞12月12日（日）13時半～
＜場所＞文学館１階ホール
演題：「ランドルフ・コールデコットの絵本、その伝統と発展」
講師：吉田新一氏（児童文学者）

利用案内

開館時間　午前９時～午後５時（入館は、午後４時30分まで）

休館日　毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～１月１日）

観覧料　一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔上記参照〕
20人以上の団体は２割引。高校生以下、高知県（市）長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者１名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内

●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●ＪＲ高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
●バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
〒780-0850

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp　http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/